

999円で聴くジャズの名演

Contemporary Jazz Magazine

第35巻第10号(通算第408号)
平成23年9月14日発売
(毎月1回14日発売)
定価 880円

jazzlife

10
2011 OCTOBER

Cover Story

渡辺貞夫

ニューヨーク録音の新作
『カムトゥデイ』を語る

エティエンヌ・ムバペ
ヴァンガード・
ジャズ・オーケストラ

菊地成孔

布施明

土岐英史

増崎孝司

宮野寛子

KANKAWA

明田川荘之+高橋知己

渋谷毅+平田王子

【独占スペシャル・インタビュー】

ソニー・ロリンズ

【イベント・レポート】

真夏の夜のJAZZ in HAYAMA
~Tribute to Bill Evans

テイヴ・ダグラス "Tea for 3"
Live at Porto

【スコア】

インヴィテーション

ジャコ・パストリアス with
マイケル・ブレッナー&ボブ・ミンツァー

ワーク・ソング

キャンボール・アダレイ

レインチェック

ソニー・ロリンズ

バット・ノット・フォー・ミー

アーモッド・ジャコル(ジャズ・ドリル)

浄気はやめた

スタンダード・ベース講座

カム・レイン・オア・カム・シャイン

毎スターティングライターに注目する

【ジャズ・ジャイアンツ入門】

キャンボール・アダレイ

【楽器企画】

エレクトリック&ウッド・ベースのための

小型ベース・アンプ・ヘッド選び

Jaco Pastorius

REBIRTH of JP

【ジャコ・パストリアス特集】

ワーナー時代のジャコ・パストリアス
ピーター・アースキン=来日直前インタビュー

ジャコ・パストリアス生誕60周年

Unified Stan Killian



Sunnyside Communications SSC 1282

■1. Twin Dark Mirrors 2. Elvin's Sight 3. Unified 4. Center 5. Isosceles 6. Window Of Time 7. Eternal Return
■ Stan Killian(ts) Benito Gonzalez(p) Corcoran Holt(b/1,4,5,7) Bryan Copeland(b/2,3,6) Darrel Green(ds/1,2,3,5,6) McCleerty Hunter(ds/4,7) Roy Hargrove(tp/1,5) Jeremy Pelt(tp/4,7) David Binney(as/2,3,6)

ニューヨークを拠点に活動するスタン・キリアンは、アントニオ・サンチェスらトップ・プレイヤーとも共演を重ねる注目の若手。野太いトーンでリカルなフレイズを紡ぐそのスタイルにはジョー・ヘンダーソン辺りの影響が感じられる。作曲を含め、若さゆえの固さも散見されるが、そのフィーリングは秀逸。日本でも注目を集めるのにさほど時間はかからないだろう。また、ロイヤレミーのプレイはもちろん素晴らしいけれど、あくまでゲストとしての位置づけ。むしろ、アルバムにミステリアスな彩りを添えるベニート・ゴンザレスのピアノが実に面白い。〈御子柴亮輔〉

Change Of Scenes Mario Biondi



SCHEMA SCCD455

■1. A Little Piece Of My Life 2. No Mercy For Me 3. On A Clear Day (You Can See Forever) 4. A Handful Of Soul 5. I'm Her Daddy 6. This Is What You Are 7. I Can't Keep From Cryin' Sometimes "inner mix part 1" 8. I Can't Keep From Cryin' Sometimes "walk in blues part 2" 9. Slow Hot Wind 10. Rio De Janeiro Blue 11. This Is What You Are 12. But Not For You
■ Mario Biondi(vo) Luca Mannutza(p) Fabrizio Bosso(tp) Alex Lugli(ds) Mauro Ottolini(tb) Marco Brioschi(tp) Alessandro Magnanini(kb) Luciano Cantone(ds) etc

硬派なハード・バップが効かるとか想像していたら、流れてきたのはビチャート・ファイヴにも似たコケティッシュなサウンド。そこにビオンディの塩辛声が増えると、一気にアーシーなクラブ・ジャズになる。ニコラ・コンテの最新盤もそうだったが、ポップなニュアンスを取り込んできたときのセンスの良さにおいてイタリアの彼はあまりにも秀逸だ。ポツンをはじめとする各人のソロも聴き応えがあるから、ラブで大音量で鳴らしても踊れるし、部でひとりじっくりと聴き込んでも浸れるステーマというレーベルの懐の深さと品良さを味わえる良作。〈御子柴亮輔〉

Dieci Max Ionata Quartetto



Viavento Jazz VVJ 070

■1. Abstobard 2. Coltrane Meet Evans 3. La Talpa 4. Turn Around 5. Who Can I Turn To 6. Lode 4 Joe 7. L'Altalena 8. Attila(Lease)
■ Max Ionata(ts) Luca Mannutza(p) Nicola Muresu(b) Nicola Angelucci(ds) Fabrizio Bosso(tp,fln)

イタリアの伊達男、マックス・イオナータのレギュラー・カルテットによる最新作。ゲストとしてファブリッツィオ・ボッソを迎えながら、過度なブロウはせず、モータルなプレイをじっくりと聴かせてくれる。クオリティの高い作品を連発しているイオナータだが、スタンダードをラインナップに加えていないことからわかるように、今作は何に媚びることもなく、彼のやりたいことが自由にできているように感じる。太く木管的な音色、豪放なプレイ、繊細な表現力——決して派手ではないけれど、彼の多面的な魅力を味わえる充実の1枚に仕上がった。〈御子柴亮輔〉

Dig It to the End Tonbruket



ACT 9026-2

■1. Vinegar Heart 2. Balloons 3. Decent Life 4. Lilo 5. Lighthouse 6. Dig It to the End 7. Gripe 8. Grandma's Haze 9. Le Var 10. Trackpounder 11. Draisine Song
■ Dan Berglund(b) Johan Lindstrom(g,lap,pedalsteel, kb) Martin Hederos(p,pumporgan, kb, vln) Andreas Werliin(ds,perc) Nino Keller(perc/3 & 9, additional drums/10) Tomas Hallonsten(org/9)
■ Recorded at Atlantis Studio in Stockholm

2008年、エスビョルン・スヴェンソンの夭折によって消滅した伝説のピアノ・トリオ、E.S.T.。そのベーシスト、ダン・ベルグランドが結成したバンドTonbruketの2nd作がリリースされた。前作で大きくロックへと踏み込んだその音楽は本作でさらに多様性を帯び、ロック、ジャズ、クラシック、カントリーなどの様々な音楽を包括したノー・ボーダーな音楽を展開させる。荒々しいビートが横溢する①②、ラベルの「ボレロ」を発展させた⑨などの力感溢れる楽曲や、クリス・ミン・ドーキーを思わせるようなリリズムが光る④⑩など、カラフルな世界が広がる。〈早田和音〉

Composer in Dialogue; Winter Sun Crying William Parker & ICI Ensemble



Neos Music NEOS 41008

■1. Bells 2. Train 3. Winter Sun Crying 4. Earth 5. Moon 6. Orphans 7. Explosion 8. Tears 9. Hope 10. Sky 11. Grandmother 12. Circle 13. Hello 14. Revolution 15. Let's Change the World
■ William Parker(b, pic, tp, shakuhachi, double reeds) David Jager(ss, ts) Roger Jannotta(as, pic, fl, cl) Markus Heinze(bs, ts) Christofer Varner(tb, sampler) Johanna Varner(vc) Martin Wolfrum(p, kb) Gunnar Geisse(laptop, laptop guitar) George Jancker(b, G2) Sunk Poschi(ds)
■ Recorded live at Muffathalle, Munich on December 20, 2009

フリー・ジャズ界の重鎮にして奇才ウィリアム・パーカー。60歳を間近に控えたヴェテランながら、近年も様々な音楽への接近を試みるなど、創作意欲に些かの衰えも見せない姿は頼もしい限り。本作はパーカーが、ミュンヘンを拠点とする国際的音楽集団ICI Ensembleと共演した2009年のコンサートの様相を収録したSACD作品。フリー・インプロヴィゼーションを中心とする演奏だが、冗長な雰囲気とは無縁のストーリー性の感じられる内容。幽玄な世界を描き出す①に始まり、緊張感溢る⑩や大迫力の⑭などを経て、最後は自身の尺八でしみじみと締めくくる。〈早田和音〉

The Mosaic Project Terri Lyne Carrington



Concord Jazz CJA-33016-02

■1. Transformation 2. I Got Lost In His Arms 3. Michelle 4. Magic And Music 5. Echo 6. Simply Beautiful 7. Unconditional Love 8. Wistful 9. Crayola 10. Soul Talk 11. Mosaic Triad 12. Insomniac 13. Show Me A Sign 14. Sisters On The Rise(A Transformation) ■ Terri Lyne Carrington(ds,perc,vo/2,4,5,11,13,14) Geri Allen(p, kb/1, 3, 6, 7, 10, 11, 13) Dee Dee Bridgewater(vo/10) Anat Cohen(d, bcl, ss) Angela Davis(commentary/5) Sheila E.(perc/1, 5, 6, 10) Nona Hendryx(vo/1, 14) Ingrid Jensen(tp, flh, etc) Mimi Jones(b/4) Carmen Lundy(vo/13) Chia-Yin Carol Mai(vl) Hailey Niswanger(fl) Gretchen Parlato(vo/2, 3) Tineke Postma(ss, ss) Dianne Reeves(vo/5) Shea Rose(vo/14) Patrice Rushen(p, kb/1, 2, 5, 10, 11) Esperanza Spalding(b, vo/7, 9) Helen Sung(p, kb/2, 4, 5, 8, 9, 11, 12) Linda Taylor(g) Cassandra Wilson(vo/6)

昨年の東京JAZZを沸かしたテリ・リン・キャリントン率いるモザイク・プロジェクト。その際に日本でのみ発売され話題を呼んだ作品が、装いも新たにConcordから再リリースされた。曲順と収録曲に若干異なる点が見受けられるが、その中で最も注目すべきは新たに収録された④⑩。昨年末に急逝したソウル歌手ティーナ・マリーへの追悼の想いゆ籠められた④。情感溢れるテリのヴォーカルとしっかりとしたヘレン・スンのピアノが涙を誘う。シェイ・ローズのラップをフィーチャー。ヒップホップに仕上げた⑩もGOOD。傑作アルバムがいっそう華やかさを増した。〈早田和音〉

Jordan Arne Huber Quartet



Nagel Heyer Records nagel heyer 2097

■1. Iantana 2. My Little Brown Book 3. Jordan 4. Gemini 5. Freitag 6. Reincarnation of a Lovebird 7. Yesterday, Today & Tomorrow 8. Everything I Love
■ Arne Huber(b) Domenic Landolf(ts, cl) Rainer Bohm(p) Jochen Ruckert(ds)
■ Recorded on November 29 & 30, 2009 at Systems Two Studios, Brooklyn

ドイツの若手ベーシスト、アルネ・フーバーが、長年の盟友でもあるピアニストのライナー・ベームをはじめとする同国の若手精鋭と共に制作した1st作は、若者らしい野心と清々しさに満ちた作品。ちょっとつんのめった感じの変拍子に乗せてドメニク・ランドルフのテナーが軽快なブロウを聴かせる①で耳をそばだたせた後に繰り返される、クラリネットによるノスタルジックな②。アルバム冒頭の2曲のオリジナルのコントラストが妙興味。チャールズ・ミンガスのナンバーをエレガントに仕上げた⑥からもフーバーの個性と主張がしっかりと感じられる。〈早田和音〉

Platform Blue Break



Mons Records MR 874514

■1. Platform 2. Beautiful Mind 3. Disorientation 4. Falling Fight 5. Way of Life 6. Garfield's Workout 7. Cold Snow
■ Max Mackel(p) Judith Krischke(b) Karl Degenhardt(ds)

ドイツからフレッシュなピアノ・トリオがデビューした。ジャケット写真には昭和の歌謡ポップスのようなテイストも漂うが、ディスクからは現代感覚溢れる清新なサウンドが送り出る。紅一点のベーシスト、ユディット・クリシュケのアルコから紡ぎ出される情感溢れる旋律と、その後には続く力強い11拍子による怒涛のアンサンブル。静と動のコントラストが目映い①が聴く者のハートをがっちり掴む。7拍子と16ビートが交錯する③や、組曲のような展開を見せる⑦など、どの曲にも創意溢れるドラマが盛り込まれている点にこのトリオの主張が感じられる。〈早田和音〉

Three-Fingered Lightning Django Reinhardt



ideacle audience
3079388 (DVD)

■ 1. Three Fingered Lightning (52min) Bonus Tracks (14min) 1. J'attendrai / Django Reinhardt 2. Stephan Grappelli (1938 BBC) 2. Anouman / David Reinhardt Trio 3. All Love / David Reinhardt Solo 4. Anouman / David Reinhardt Solo
■ Format: NTSC
■ Region Code: 0

ジャンゴのTVプログラムをDVD化。2010年にフランスで制作されたもので、ジャンゴの生涯と音楽、ヨーロッパにおけるジャズ音楽の歴史やジブシー音楽との関係がていどいかにまとめられている。本作はフランス語版だが、日本語を含む5か国語の字幕が用意されており、鑑賞を容易してくれる。今回新たに発掘された音源・映像はないが、アンリ・サルヴァドール、アンドレ・オデル、マーシャル・ソラールらの興味深いインタビューや、ボーナス・トラックにはジャンゴの孫であるダヴィッドのソロ、トリオ演奏が収録されている。入門者から研究者にもお勧め。(小川浩)

Milo Songs

Anne Mette Iversen Quartet



bjurecords
BJUR-025

■ 1. The Terrace 2. The Storm 3. Drum Dreams 4. Trains & Chocolate 5. Milo's Brother 6. Child's Worlds 7. Cortot's Wheel
■ Anne Mette Iversen (b) John Ellis (ts, cl) Otis Brown III (ds & cymbals) Danny Grissett (d)
■ Recorded at Peter Karl Studios, New York, Feb. & March, 2011

2008年にリリースされた2枚組の力作「ベスト・オブ・ウエスト、メニー・プレイス」に続くアン・メッテ・アイヴァーセンの最新作。彼女の2歳になるお嬢さん、ミロちゃんが歌うメロディに触発されて書かれたというオリジナル曲をクアルテットで演奏する。子供の曲と言ってもちゃんとしたジャズ曲となっていて、決してお子様向けではない。ジョン・エリス(ts, cl)の演奏が素晴らしい。彼自身のリーダー作でのプレイを凌ぐ出来。本作のアイヴァーセンに、エスペランサの華はなくとも確かな音楽の手応えのある佳作。それにしてもジャケット・デザインは地味すぎる。(小川浩)

Lettuce Play

Bert Seager Trio



Invisible Music
IM-2047

■ 1. A Sound Called Home 2. The Raft 3. Noctane 4. Re-invented the Wheeler 5. Lando the Free 6. Like Someone in Love 7. Air 8. You Go To My Head 9. Unforeseeable Changes
■ Bert Seager (p) Jorge Roeder (b) Richie Barshay (ds)
■ Recorded at Fraser Recording Studio WGBH, Boston, Feb. 3&4, 2011

パート・シーガー・トリオの新作。「レタス・プレイ」とは「レット・アス・プレイ」の意味らしいのだが、2006年にリリースされた同じメンバーによる「ビート・グリーン」に続く野菜系ジャケット・デザイン。ペルー出身のベース奏者ホルヘ・ローデルと、ハービー・ハンコックやチック・コリアのドラマーとしての活躍でも知られるリッチー・バーシェイによるトリオ。⑥⑧以外はパートのオリジナル曲。シングル・トーンを生かしたりリカルなメロディと、時にワイルドな表情を見せるリズム・セクションの対比が妙気味良く、ピアノ・アルバムの良い一作となった。(小川浩)

Wonderful!

Deep Blue Organ Trio



Origin Records
82595

■ 1. Tell Me Something Good 2. If You Really Love Me 3. Jesus Children of America 4. My Cherie Amour 5. Golden Lady 6. You Haven't Done Nothin' 7. It Ain't No Use 8. As 9. You Got It Bad Girl
■ Chris Foreman (org) Greg Rockingham (ds) Bobby Broom (g)
■ Recorded at Victorian Recording, Barrington, IL. Dec. 18, 19 & 20, 2011

ディーブ・ブルー・オルガン・トリオの新作はステイヴィー・ワンダー曲集だが、地味目の選曲が効いて好ましい結果を招くことになったようだ。ギターのリッチー・ブルームを核としたトリオで、かつてのリヴァーサイド・レーベルにおけるウェス・モンゴメリーのオルガン・トリオを思い起こすようなオクターヴ奏法と、控え目だがシングル・トーンのよく歌うソロで、本作の要としての存在感をアビュ。オルガンのクリスは出生時から視力を失い、ステイヴィーと似た境遇に育った。最初はピアノを学び、オルガンを始めたのは20歳になってからという。(小川浩)

The Age We Live In John Escreet



Mythology Records
MR0010

■ 1. Intro 2. The Domino Effect 3. Half Baked 4. The Age We Live In 5. Kickback 6. A Day In Music 7. Interlude 8. Hidden Beauty 9. As the Moon Disappears 10. Stand Clear 11. Another Life 12. Outro
■ John Escreet (p, rhodes) David Binney (as, electronics) Wayne Krantz (g) Marcus Gilmore (ds, perc) Tim Lefebvre (b-cl) Brad Mason (tp) Max Seigel (tb) Strings by Christian Howes String Productions
■ Recorded at the Clubhouse, Rhinebeck, NY. Dec. 20'21, 2010

英国出身のピアニスト、ジョン・エスクリート(1984~)の最新録音。本作のレーベル・オーナーでギタリストのウエイン・クラントツにデイヴィッド・ピニー(sax)、マカス・ギルモア(ds)によるクアルテットの演奏を中心に、曲によってプラスとストリングス・セクションが観られる。30秒程度の短いイントロ〜インターリュード〜アウトロに挟まれるエスクリエットのオリジナル曲が、ジャズ・フュージョン・タイプから前衛ロック風まで多彩なアレンジで繰り広げられる。若いリーダーにも増してピニーやクラントツも好調なソロ・プレイで盛り上げる。(小川浩)

MTO Plays SLY

Steven Bernstein's Millennial Territory Orchestra



The Royal Potato Family
RPF 1110

■ 1. Stand 2. Family Affair 3. Sly Notions 4. Que Sera, Sera 5. M'Lady 6. You Can Make It If You Try 7. Everyday People 8. Bernie Interlude 9. Skin I'm In 10. Sly Notions 2/Fun 11. Time 12. Thank You For Talkin' To Me Africa 13. Life
■ Millennial Territory Orchestra : Steven Bernstein (tp, slide tp) Curtis Fowlkes (tb) Charlie Burnham (vln) Doug Weiselman (cl, ts) Peter Apfelbaum (ts, ss) Erik Lawrence (bs, ss) Matt Munisteri (g, banjo) Ben Allison (b) Ben Perowsky (ds) Special Guest : Bernie Worrell (org) Vernon Reid (g) Bill Laswell (ei-b) Sandra St. Victor (vo/1, 2) Antony Hegarty (vo/2) Martha Wainwright (vo/4) Dean Bowman (vo/5, 10, 11) Shilpa Ray (vo/7)
■ Recorded and mixed at Brooklyn Recording, NY by Andy Taub.

デューク・エリントン(p)のジャンル・サウンドからビートルズまで、音楽の時空軸を軽々と飛び越える、鬼オスティエヴン・バーンスタイン(tp)率いるミレニアル・テリトリー・オーケストラは、今回スライ&ザ・ファミリー・ストーンに着地した。P-Funkのキーボード奏者、バーニー・ウォーレルや、リヴィング・カラーのギタリスト、ヴァーノン・リード、そしてサンドラ・セイント・ヴィクター、ディー・ボウマンを中心に5人のシンガーをゲストに迎え、アーシーな味付けのMTOサウンドで、スライのヒット・チューンを料理している。(常盤武彦)

Destinations Unknown

Alex Sipiagin



Criss Cross Jazz
1336

■ 1. Next Stop - Tsukiji 2. Videlles 3. Tempest in A Tea Cup 4. Fermata Scandola 5. Calming 6. Fast Forward 7. Meu Canario Vizinho Azul
■ Alex Sipiagin (tp, flh) Chris Potter (ts) David Binney (as) Craig Taborn (p, kb) Boris Kozlov (b) Eric Harland (ds)
■ Recorded at Systems Two Recording Studios, Brooklyn, NY by Michael Marciano on January 14, 2011.

ミンガス・ビッグバンド、デイヴ・ホランド(b)・グループで、活躍するトランペット奏者アレックス・シピアギンの新作は、世界各都市をツアーした街の印象や、現地のミュージシャンとの共演で得たインスピレーションを集め、「Destinations Unknown」「到着地不明」と題された。ミンガス、ホランド・グループでの同僚のクリス・ポッター(ts)、デイヴィッド・ピニー(as)の強力なサポートで、10分を超す大作が5曲を占める。クレイグ・タブォンのフェンダー・ローズが、独特の空気感を醸している。唯一のカヴァー曲⑦も、秀逸である。(常盤武彦)

Dancing With Duke

John Brown Trio



Brown Boulevard Records

■ 1. In A Mellow Tone 2. Do Nothing 'til You Hear From Me 3. Perdido 4. Pie Eye's Blues 5. Isfahan 6. I'm Beginning To See The Light 7. A Flower Is A Lovesome Thing 8. I Got It Bad (And That Ain't Good) 9. Solitude 10. It Don't Mean A Thing (If It Ain't Got That Swing)
■ John Brown (b), Cyrus Chestnut (p), Adonis Rose (ds)
■ Recorded at Acoustic Barn Studios, Charlotte, NC by Rick Dior on March 13th & 14th, 2010.

ベース奏者ジョン・ブラウンは、90年代のエルヴィン・ジョーンズ(ds)率いるジャズ・マシーンや、ニーナ・フェローン(vo)・グループでのプレイで知られている逸材。前作では、クインテットでアート・ブレイキー(ds)へのトリビュートを擧げたが、今作では、90年代初頭からしばしば共演しているサイラス・チェスナット(p)と、ニューオーリンズ出身のアドニス・ローズ(ds)とのトリオで、軽快にスウィングするデューク・エリントン(p)作品集をものした。スウィート・バラッド組曲と題された⑦、⑧、⑨のメドレーのリリシズムも美しい。(常盤武彦)